アンコール=ワット
（シエムリエプ／カンボジア）

2025年度
後期号

日々の授業を
さらにサポート！

地歴・公民科資料
ChiReKo（ちれこ）

付録

❶ 世界の“NOW”を探る現地探訪
帝国書院取材班が行く！
カンボジアの自然・文化・産業

❷ 地図帳活用コトハジメ付録ワークシート
地図帳から読み解く「世界の産業と人々の生活」に関するワークシートの活用について 解説：鈴木 康平

帝国書院

CONTENTS

2 帝国書院 取材班が行く！
カンボジア

4 地図帳活用コトハジメ 鈴木 康平
地図帳から読み解く
「世界の産業と人々の生活」

6 教育情報ナビゲート
多久島 亮／新井 優希／森田 浩司／新 友一郎
高等学校の先生方による座談会
令和7年度大学入学共通テスト「地理総合、地理探究」を振り返る
－育成したい力と求められる授業－

9 研究最前線～地理 根本 学
気候変動と北海道の米づくり

12 授業研究 地理 山田 智之
複数の**主題図や統計を活用し理解を深める授業**
－エネルギー分野を事例に－

16 授業研究 世界史 大橋 康一
心理学から見た思考力の評価
－本物の思考力を評価しよう－

20 授業研究 日本史 井上 渚沙
「日本人移民」から考える日本史探究
－大磯町とハワイ移民から、地域・日本・世界へ－

24 授業研究 公民 福田 秀志
資料集『ライブ！公共 2025』を活用した
思考力・判断力を育てる「公共」の授業
－共通テストを意識した授業展開例－

28 史料読解 財城 真寿美
歴史資料から復元する気候変動

30 キャッチ！ 日本と世界の動き

帝国書院 取材班が行く！

カンボジア

カンボジア王国 基本情報（2023年）
首都：プノンペン　人口：約 1709 万　面積：約 18.1 万㎢　年平均気温：28.7℃（プノンペン）

①

『新詳高等地図』p.25 より

カンボジアにはどのようなイメージがあるだろうか。アンコール遺跡群やトンレサップ湖、ポル=ポト政権による虐殺。そして内乱からの復興。取材班はカンボジアの「今」を調べるため、雨季のトンレサップ湖周辺と経済発展著しい首都プノンペンを中心に現地に入った。

東南アジア最大の湖「トンレサップ湖」

東南アジア最大の湖、トンレサップ湖は雨季と乾季で水位が大きく変わる。雨季の面積は乾季の３倍にもなり「伸縮する湖」と呼ばれる。トンレサップ湖が雨季に面積を増す理由は、メコン川の増水により、普段は湖から流れ出す支流トンレサップ川が逆流するためである。近年雨季になってもそれほど水位が上がらない現象が生じており、2024 年８月末の訪問時も例年より水位は低かった。気候変動などさまざまな要因が挙げられるが、メコン川からの逆流が減っており、その原因として中国によるメコン川上流での多数のダム建設を指摘する意見もある。

トンレサップ湖とともにある暮らし

トンレサップ湖周辺に暮らす人々の住居は高床である（**写真①**）。その多くは３階建てで、水位が最高に達した時に最上階が水上にあるように作られている。生活の場は最上階で、中間層や最下層は作業場や物置として利用されている。舟は１家に１艘（そう）の必需品である。

高床の住居は風通しがよくなるよう、隙間を空けて床板が並べられている。隙間からはるか下に地面が見えるので、慣れない取材班は少し怖かった（**写真②**）。

取材時の昼食は長粒種の白米に野菜と肉のスープ、焼き魚、スイカ。ちなみに「いただきます」「ごちそうさま」に当たる

言葉はクメール語にはなく、用意ができたら食べ始め、食べ終わったらおしまい。食事中の会話はなく至って静かである。

カンボジアでは一般家庭での冷蔵庫の普及率はまだ２割程度だという。大半の人々は市場（**写真③**）でその日食べる分を買い、調理して消費する生活スタイルだ。

市場では、オレンジ色の袈裟（けさ）を着た少年僧がはだしで托鉢していた。人々は信仰心があつく、仏事も僧侶も大切にされている（**写真④**）。

湖畔の村チョンクニアにはベトナム人コミュニティーの水上集落があり、こちらはタンクやドラム缶を使った浮家構造である。水位の変化とともに建物も移動する。小学校も水に浮いており、子どもたちは舟で登下校する。われわれにとっての自転車以上に舟は生活の一部となっている（**写真⑤**）。

首都プノンペンで見た日本とのつながり

プノンペンでは 20 年ほど前からまずバイクが、その後乗用車が普及したといい、日本車のプリウスが多数走っていた。排気量 125cc までのバイクは免許不要だが、ヘルメットは義務化されている（**写真⑥**）。首都とはいえ信号機は少なく、道路を渡るのは一苦労。稀に見かける信号機は日本製だった。

市内のロータリーには、銃身を縛った拳銃のモニュメントがあった。内戦で多くが破壊されたこの国で、もう戦いはごめんだという強い意思表示に思えた（**写真⑦**）。

プノンペン中心部にはトンレサップ川を東西に結ぶ日本の ODA によってできた、チュロイチョンバー橋があり、橋の西詰には日本とカンボジアの国旗が描かれた記念碑（**写真⑧**）がある。また、メコン川にも日本の協力により造られた２つの橋があり、それらの橋と両国の国旗が刻まれた記念碑は同国の 500 リエル札に描かれている。

日本の学校水着のトップシェアメーカーであるフットマーク社のプノンペン工場を訪問した（**写真⑨**）。カンボジアでは水泳の授業はなく、ほぼ 100%日本向けで、ここでは日本の小学校で使う赤白帽も作っている。プノンペン SEZ（経済特区）内にあり、税制優遇やワンストップで物事が進む、英語が通じるなどの利点があるというが、進出の最大の理由はカンボジア人のまじめさ、人柄の良さだったという。カンボジアと日本のつながりは、想像以上に深く、これからも大切にしていきたいと感じた取材だった。

取材後記

29 歳以下が人口の 53.7%（日本は 26.2%）で若さを感じる国であった。ポル=ポト時代に国民の４分の１が虐殺されるという悲惨な過去を背負いながら、平和にたくましく成長している国でもある。飛び込み取材にも市場でカメラを向けても笑顔で応じてくれる優しさに、救われる思いだった。

写真：2024 年８月撮影／帝国書院